

受け継がれた命

沖縄県立開邦高等学校
三年 大城 さゆり

森山良子さんの歌う「さとうきび畑」を聴くと、私はとても切なくなる。そして祖母のことを思い出す。一九四五年、祖母の父（私の曾祖父）は防衛隊員として沖縄本島南部の戦場に赴き命を落とした。いつ、どこで、どのように亡くなったか未だにわからない。当時まだ九歳だった祖母と家族は、米軍が沖縄本島に上陸する間に、北中城村仲順を離れ、今の名護市天仁屋に疎開した。祖母の祖母、母、そして小さな妹弟たちとともに持てる限りの生活用品をかついで歩いて行った。天仁屋での生活は食糧が乏しく苦しいものだった。沖縄には「ソテツ地獄」という言葉があるが、ソテツの実の毒抜きをして食べねばならないほど、生活はたいへんだった。幸いにも疎開した家族は戦火で命を落とすことなく、終戦後仲順に帰ることができた。しかし、祖母の父はどうとう帰ることはなく、疎開前の別れが「最期の別れ」となってしまった。私の曾祖父は当時二十八歳の若さだった。村でもリーダー的な存在で、誰にでも親切で面倒見がよく、村芝居など率先して行っていたらしい。そんな自慢の父を祖母は戦争で失った。南部に広がるさとうきび畑の下に私の曾祖父は眠っているのかもしれない。風に波打つさとうきび畑の光景を見ると、私は森山良子さんの歌を思い出す。幼くして父を亡くした祖母の悲しみはどれほど大きかったか。

祖母の実家はまだ仲順にある。奇跡的に戦火を免れ、仲順集落では戦前から残っている唯一の屋敷だそうだ。私は正月やお盆など行事のたびに仲順を訪れる。私が幼い頃、とてもかわいがってくれた曾祖母はもう他界していないが、仲順の家に入ると沖縄らしい温かさを感じる。仏壇のある座敷の欄間に、曾祖母の写真と並んで若い軍服姿の曾祖父の写真がある。北海道から嫁いできた私の母は、初めて仲順の家を訪れた時、曾祖父の写真を見て、「健さん（私の父）にそっくりだ」と思ったそうだ。確かに父の若い頃の写真に似ている。曾祖父は戦争で亡くなったが、祖母、そして父を通して、私へと命が受け継がれた。

祖母だけでなく、祖父も沖縄戦では苦しいつらい体験をした。祖父は当時十四歳、北中城村熱田に住んでいた。祖父の父がフィリピンに出稼ぎに行っていたため、熱田では母、兄、姉の四人暮らしだった。ただ祖父の兄は工業学校の生徒で、戦争中は鉄血勤皇隊の一員として日本軍とともに行動していた。祖父も戦争さえなければ四月から師範学校への入学が決まっていたが、沖縄戦のため入学できなかった。祖父の家族は、「軍の後方にいるのが安全だ」と言う祖父の叔父に従い、叔父の家族とともに南部へ移動した。移動中、多くの負傷者と出会ったが、医者だった祖父の叔父は、多くの兵士、民間人の治療にあたった。しかし、日に日に戦火は激しくなり、とうとう祖父の姉が米軍機による機銃掃射で大けがをして、歩けない状態になった。その時、一緒にとどまろうとした祖父に対し、母から叔父たちと一緒に行くように説得され、祖父は泣く泣くその場を離れた。しかしこれが祖父と母、姉との最期の別れになった。その後、喜屋武岬近くのガマにいたところ、米軍の砲撃を受けて叔父の家族が全員亡くなった。その時祖父は、「人生の中で、あの時ほど絶望したことはなかった」と私に話してくれた。戦場で家族を失い、独りぼっちになってしまった祖父（少年）の姿を想像した時、私だったらどうしてい耐えられないだろうと思う。祖父の兄は通信兵の役割を果たし、南部で戦死した。現在、沖縄工業高校の慰霊碑に名前が刻まれている。

祖父と祖母は、毎年六月になると摩文仁にある「平和の礎」に赴く。祖父は三年前から車いすを使用しており、体が不自由になったにも関わらず、そのことは欠かさない。二人は礎の前で手を合わせ、刻まれた肉親の冥福を祈るとともに、子や孫、沖繩の将来と悠久の平和を祈る。私も二人の傍らで手を合わせ、曾祖父母をはじめ沖繩戦で亡くなった方々の冥福を祈る。戦争中から戦後にかけて、祖父母は苦勞しながら生活してきた。これは私の祖父母に限らず、全ての沖繩戦体験者に言えることだ。私たちが今、平和を享受し、豊かな生活を営めるのも、こうした先人たちの苦勞があつたからである。また、あのつらい沖繩戦を生き抜いてくれたからこそ、今の私たちの生もあるのだ。私は、絶望の中にありながらも、生き残ってくれた祖父母に心から感謝するとともに、こうして受け継がれた命だからこそ大切にしていこうと思う。また曾祖父母をはじめ沖繩戦で亡くなった方々の無念さもしっかり受けとめて、戦争のない平和な世界を築いていけるよう行動することが、沖繩に生まれた私たちの責任だと考える。